研究者識別子ORCIDの取り組み

An introduction to ORCID (Open Researcher and Contributor ID)

蔵川 圭¹ | 武田 英明¹

KURAKAWA Kei¹; TAKEDA Hideaki¹

.....

1 国立情報学研究所 (〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2) E-mail: kurakawa@nii.ac.jp; takeda@nii.ac.jp

1 National Institute of Informatics (2-1-2 Hitotsubashi Chiyoda-ku, Tokyo 101-8430)

原稿受理 (2011-11-21)

情報管理 54(10), 622-631, doi: 10.1241/johokanri.54.622 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.622>)

著者抄録

本稿では 2009 年より始まった国際的な研究者識別子付与活動である ORCID (Open Researcher and Contributor ID) について解説する。ORCID は世界中の研究者に一意の識別子を与えることで、さまざまな学術コミュニケーションを円滑にすることを目的としている。このために学術コミュニケーションに関与する出版社、大学、研究助成機関等が集まって非営利法人 ORCID Inc. を設立して、活動の母体としている。現在 300 近い組織が参加している。ORCID の ID は個別の研究者にとっては自己の研究業績の集約や他の研究者の業績の発見に役立つ。大学にとっては組織の業績をまとめるのに貢献する。出版社には著者や査読者の同定に貢献する。研究助成機関にとっては、応募者の同定に役立つ。ORCID のサービスは 2012 年の初頭に最初の機能限定版が公開され、2012 年中にはより多くの機能を含んだサービスが公開される予定である。

キーワード

研究者識別子, 研究者ID, 名寄せ, 研究者プロフィール, 書誌, ORCID, 学術情報流通

1. はじめに

ORCID (Open Researcher and Contributor ID) は、学術情報流通の世界を対象としてさまざまな利害関係者が集まって研究者の名寄せの問題に取り組む国際的な組織である。本稿ではORCIDができた背景である研究者／著者の識別子と名寄せの問題の現状からORCIDの活動の紹介、今後の展望を述べる。

2. 研究者識別子とは

まず研究者識別子とはどのようなものであるかについて概観する。

2.1 なぜ今研究者識別子なのか

Web以前においては、主な研究情報入手手段はジャーナルであり、研究者はジャーナル論文の著者名を頼りに関係論文を探したり、時には著者に直接連絡をとって論文を手に入れたりしていた。

で存じのようにWebはまずは研究情報の共有のために開発されたものであり、研究者はWebの最初のユーザーであった。研究者はさまざまな研究情報をWebを通じて公開したが、その中に自分自身の情報も含まれていた。自分の名前と関連情報を“ホームページ”として公開した。

Webが普及するにつれ、研究情報は大量にWeb上にあがるようになった。個人のホームページから、ジャーナル論文情報、会議の情報、大学のページ、プロジェクトのページ、等々と多様な情報が公開され、その中に研究者名が含まれている。研究者名がWeb上に溢れるようになった。

一方でインターネット／Webは研究のグローバル化と学際化を加速した。異なる組織・地域の研究者が容易に共同研究をすることができ、また違う分野の研究情報が即座に探せるようになり従来の分野に限られない研究も可能になった。すなわち知りたい研究者の範囲は格段に拡大した。

このような研究者に関する情報の増大と研究者のボーダレス化によって、名前に頼った情報の探索が困難になってきた。

典型的な問題は以下のようなものである。

(1) 同姓同名問題：Web検索や論文データベース検索において同姓同名を区別したい。分野を限らず検索できるようになったため、ますます同姓同名は頭の痛い問題となっている。

(2) 異動する研究者の同定：組織を異動した研究者の情報を把握したい。情報が複数組織の情報源に分散したり、文献でも異なる所属機関となっているため同一人物か把握しづらい。

(3) 研究者IDの統合：近年、多くのサービスが名寄せのために著者や研究者のIDを提供している。一人の研究者がそれぞれのサービスで別のIDになっている。このようなIDを研究者ごとにまとめたい。

(4) 所属研究者の情報の集約：大学などの組織が自組織所属の研究者の活動を集約したい。すべての研究情報に所属組織が書かれているわけではないの

で、組織名だけでは調べることができない。

そこで世界中のすべての分野の研究者を一意に同定する識別子が求められるようになった。

2.2 研究活動の異なる立場

研究者を識別する識別子は個別の人にIDをつけていくという処理であり、DOI (Digital Object Identifier, デジタルオブジェクト識別子) や類似の方法で簡単にできると思われるかもしれない。しかし、研究活動というのは多様な関係の中で行われており、その結果、研究者識別子付与はDOIなどと同様には行うことが難しい。

さまざまな社会活動の中で、芸術活動、芸能活動、政治活動などと並んで、研究活動は個人の名前が重要な分野の1つである。研究者は自分の名前で研究を行い、研究成果を公開する。この点では研究は個人的活動である。前述のようにWebで先頭をきって個人の活動を公開してきたのもそれ故である。

一方で研究活動は単に個人的活動ではない。列挙した他の活動は組織とは無関係あるいは一線を画した活動なのに比べ、研究活動は大学などの所属組織の活動と密に関係している。多くの研究は組織の中の活動であり、また研究者の大学への帰属意識は概ね高い。

さらに研究活動は出版活動でもある。成果は研究論文として発表され、多くは出版物として流通している。個々の出版社は出版物の著者として研究者の情報を収集している。また各国の中央図書館はやはり著者としての研究者の情報を収集している。

さらに研究活動は公的活動でもある。研究そのものが公共の知に貢献するという概念的な意味でも公的であるし、政府等の資金を直接的・間接的に利用している実質的な意味でも公的である。このため、資金助成機関も研究者の情報を保持している。

これらの側面の関係は簡単ではない。個人的活動と組織的活動は時には対立する見方であり、当事者が否かという点においては個人・組織と出版・公的

機関は異なる立場となる。

2.3 研究者識別子の特徴

研究活動はこのような異なる側面を持ち、この特徴が研究者のアイデンティティも形作っている。重要でかつ問題を複雑にしているのは、1つの側面からだけではうまくいかないという点である。研究者の識別子は、個人が取得する識別子であり、組織が与える識別子でもあり、出版社が与える識別子でもあり、公的機関が与える識別子でもあるような性質を持たないといけない。そして、研究者識別子は、個人のプロフィール、組織内の活動、研究業績（発表文献）、助成を受けたプロジェクトなど、それぞれの視点から多様な情報と紐づけられる。

3. ORCIDの経緯と組織

ORCIDは、上記のような多様な利害関係者が集まって、研究者識別子に取り組む国際的な組織である。

3.1 経緯

2009年11月9日、米国ボストンで研究者の識別子に関心のあるいくつかの主要な利害関係者が集まって、名前識別子サミット（The Name Identifier Summit）が開かれた¹⁾。チェアは、トムソン・ロイターのコチャルコ（David Kochalko）とネイチャー出版グループのラトナー（Howard Ratner）であった。これがORCID発足のための最初の会議となった。この会議を受けて2009年12月1日、ORCIDと名づけられる統一的な研究者IDを作るという宣言がなされた。その後、ORCID Initiativeとしてアメリカ東海岸とロンドンで数度会合を持った。

その上で、2010年8月に米国デラウェア州の非営利法人ORCID, Inc.として発足した。米国における内国歳入法典第501条C項3号の規定に基づく非課税非営利法人に申請予定である。発足については、2010年9月7日にプレスリリースを出している²⁾。この時点で115

の参加組織があった。

3.2 組織

ORCID, Inc.（以下ORCID）は、14人の理事からなる理事会により運営される。定款に理事の過半数は非営利の組織からなると規定されている。現在の理事は表1の通りである。

大学、研究所、学会、非営利法人、基金の非営利の組織から10名、出版社と企業から4名である。研究活動との関係で分類すれば、研究者の所属組織（大学）、出版や出版情報に関わる組織（出版社、学会など）、出版以外の研究者情報に関わる組織（基金、助成機関など）に分かれている。

理事の中から互選で代表を含む執行委員会が選任されている。ネイチャー出版グループのラトナーが理事会代表、トムソン・ロイターのコチャルコが会計、ハーバード大学のブランド（Amy Brand）が書記に選出された。この3人に加えてウェルカム財団のアレン（Liz Allen）、ACMのラウス（Bernard Rous）、ワイリーのバン・ディック（Craig Van Dyck）の3名が執行委員会を構成する。

理事会の下に現在3つの作業部会（Working Group）が設けられている。ORCIDの経営方法を検討するビジネス作業部会、システムの仕様を検討する技術作業部会、広報などを行うアウトリーチ作業部会である。

表1 ORCIDの理事会構成

理事名	所属組織	組織種別	役職
Liz Allen	Wellcome Trust	基金	執行委員会
Amy Brand	Harvard University	大学	書記
Craig Van Dyck	John Wiley & Sons, Inc.	出版社	執行委員会
Martin Fenner	Hannover Medical School	大学	
Diane Geraci	Massachusetts Institute of Technology Libraries	大学	
Thomas Hickey	OCLC	非営利法人	
David Kochalko	Thomson Reuters	企業	会計
Salvatore Mele	CERN	研究所	
Ed Pentz	Publishers International Linking Association, Inc. (CrossRef運営)	非営利法人	
Howard Ratner	Nature Publishing Group	出版社	代表
Bernard Rous	Association for Computing Machinery, Inc.	学会	執行委員会
Chris Shillum	Elsevier	出版社	
Hideaki Takeda	National Institute of Informatics (NII)	研究所	
Simeon Warner	Cornell University Library (arXiv.org運営)	大学

3.3 設立趣旨

ORCIDの設立趣旨は公式ホームページ上に掲げられている³⁾。

「ORCID, Inc.の目的は、学術コミュニケーションにおける著者および寄与者の名前同定問題を、個々の研究者に固有の識別子の与える中央レジストリと、ORCIDと他の著者IDスキーマと関連づけるオープンで透過性のある機構を創設することで解決することである。科学的発見のプロセスを強化したり助成や研究コミュニティにおける共同研究の効率性を上げるために、識別子と相互の関係は研究者の業績にリンク可能である」

英語版に加え、スペイン語訳と日本語訳も掲載されている。

3.4 参加組織

ORCIDへの参加は組織単位となっている。現在のところは参加は興味の表明の意味であり、参加メンバーに特に権利もないし逆に参加費などの義務もない。アウトリーチ集会へ参加できることぐらいである。

2011年11月17日現在で約280の参加組織がある。

参加組織を種類別にわけると図1の通りである。大学等のアカデミアが4割、出版社等の企業系が3割、学会や非営利機関が2割という分布である。学術機関と出版社が半分を占めている一方、それ以外の多様な関係者がいることがわかる。また、国別の分布を図2に示す。米国と英国が圧倒的多数であり、アジアからの参加は少数である。

ORCID Webサイトの“Participating Organizations”
(<http://orcid.org/participants>) より作図

図1 参加機関の種類別分布

ORCID Webサイトの“Participating Organizations”(<http://orcid.org/participants>) より作図

図2 参加機関の国別分布 (2組織以上参加の国のみ表示)

4. ORCIDのポリシーと原則

ORCIDの運営指針となる原則（Principles）がビジネス作業部会によって議論され、2010年10月に公開、12月8日に公式ホームページに掲載された⁴⁾。原則は10項目からなっており、これに基づいてビジネスモデルやシステムの機能が決定される。

原則では、まず、ORCIDが著者と貢献者を確実に特定できるようにすることによって、学術コミュニケーションにおける、固定の、明確な、曖昧でないレコードの作成を支援することを宣言し、学術分野、地理、国籍、機関の境界を超えた、オープンで透明性のある組織であることを明示している。

そして、研究者はORCIDのサービスを介して自由にIDとプロフィールを登録することが可能であり、その際プライバシーには十分に配慮することとしている。研究者のプロファイルデータは、プライバシー設定後、クリエイティブコモンズがCC0と定義する権利放棄⁵⁾の形で公開される。研究者のデータに対する権利について議論を積み重ねた結果、ORCIDから公開するデータについて権利放棄を明示することになった経緯は強調しておきたい。

また、ORCIDの開発したソフトウェアはオープンソースイニシアチブのオープンソース⁶⁾として公にリリースすることとした。オープンソースとしての公開を決めたことは、ボランティアベースによる開発コミュニティを構成することでソフトウェア開発コストを削減したい思いがある。

ORCIDのビジネスモデルは、組織が非営利でありながらも持続可能であるための必要最低限の収入を得ることを目的としている。そのためのシステムのAPIは有料と無料の双方によって構成されることを明示している。

最後に、組織内部の構成が非営利であり、活動内容について最大限に透明性を確保することをうたっている。

5. ORCIDの役割

前述したようにORCIDには研究者個人、研究機関、学会、出版社、資金提供機関とさまざまな人・組織が関与する。ORCIDはこれらのそれぞれに対し異なる役割を持つ。

(1) 研究者

ORCIDの情報を論文投稿の時や求職の時、研究資金応募の時に利用する。研究者はピアレビュー、データキュレーション、ソフトウェア開発を含むさまざまな学術的記録をORCIDに置くことができるようになる。ORCIDを通じてこういった情報を公開することで研究者は新たな共同研究者を見つけるといった研究のネットワーク構築ができるようになる。

(2) 大学および研究機関

ORCIDを自組織メンバーの行う研究の実績の評価に使うことができる。また採用時の評価にも使うことができる。これらの組織はORCIDを使うことで、組織の強みのある分野の同定や構成員の実績の追跡をより容易にできるようになる。

(3) 学会

ORCIDを使って学会員のプロフィール情報を強化したり、さらには学会員の研究成果の公開や学会員間のコラボレーション支援に使うことができる。

(4) 出版社

投稿システムにおいて著者や査読者の追跡を確実にできるようになる。同一著者の論文や共著者を関連づけて、関連学術成果の発見などに使うことができる。

(5) 資金助成機関

申請処理においてORCIDのIDを使うことで申請者の情報を簡単に入手できるようになり、処理を簡略化できる。また研究評価の段階においても個々のプロジェクトの評価に使うことができる。

さらにORCIDのIDを使うことで、学術コミュニケーション全体がよりスムーズになることが期待できる。例えばデータベースやソフトウェアの貢献者の

同定や学術的なブログやwikiなどにおける著者同定にも利用できる。

6. ORCIDのサービス

現在計画されているORCIDサービスは以下のよう
なものである。

ORCIDシステムでは各研究者にユニークなID（以下
ORCID ID）を付与する。ORCID IDは研究者個々人の
申請により作られるが、それに資金提供機関、学会、
出版社が一括してアップロードして研究者の基本情
報と結びつけられる。

基本プロフィール情報は名前や所属といった最小
限のものである（まだ議論中）。その上に、研究成果
や獲得資金といった情報が必要に応じて結びつけら
れる。

ORCIDシステムは他の研究者ID・著者ID、研究者プ
ロファイルシステムと連携して運用することを想定
している。ORCID IDは基本情報を保持し提供するこ
とで、出版社の原稿投稿システムや資金提供機関の
申請システム、研究者プロフィールシステムなど多
様なシステムを使う研究者の労力を最小化する。

ORCIDサービスは現在、2段階で計画されている。
フェーズ1は2012年初頭に開始し、フェーズ2は2012
年末を予定している。フェーズ1では現在活動中の
研究者を対象として、研究者個人と研究機関（大学）
からの情報入力を受け付ける。またトムソン・ロイ
ターのResearcherIDシステムに基づき、プライバシー
制御やCrossRefとの連携などを実装する予定である。

フェーズ2では研究活動を過去の研究者も対象とし
て、出版社や学会・資金提供機関なども利用できる
ようにする。このために複数の記録にある名前が関
連づけられるように名前同定の問題解決を行う。

7. ORCIDシステムの詳細

ORCIDのコアシステムとなるIDシステムに関する

議論は、2010年2月から9月ごろまでの間、技術作業
部会によって行われた。どのようなシステムである
べきか、システムの要件が議論され、アルファ版の
プロトタイプが構築された^{注1)}。その後、続けてプロ
ダクションシステムとしてのベータシステムの構築
に向けて議論が進んでいる。

7.1 基本的な考え方

IDシステムにおいて、アイデンティティとして扱
う基本的な情報は、

- ・著者／貢献者自身の記述
- ・著者／貢献者とその出版物間の関係の記述

の2種類である。「著者／貢献者自身の記述」は名前
や所属などを含み、研究者のプロファイルである。
「著者／貢献者とその出版物間の関係の記述」とは、
研究の業績とする論文や記事、書籍、データなどを
含むリストであり、出版物申告（Publication Claims）
と呼ぶ。これらがORCID IDと紐づけられることにな
る。

プロフィールと出版物申告の登録は、著者／貢献
者と組織の双方が行うハイブリッド型による方式が
提案されている。著者／貢献者自身によるだけでは
情報が集まりにくいので、組織がまとめて情報を登
録することによって呼び水とするわけである。

システム要件の議論は、CrossRefがこれまで
Contributor IDとして議論してきた内容を拡張してい
る。ここでは、エンドユーザー、パートナーシステ
ム、コアシステムの3つの主体が登場する（図3）。

図3 システム要件における3つの主体

エンドユーザーは、著者、貢献者、部門管理者、その他のさまざまな人である。パートナーシステムは、出版者の原稿追跡システム（Manuscript Tracking System）や研究者ディレクトリ、論文検索システムなど関連するシステムである。コアシステムは、ORCIDのIDシステムそのものである。エンドユーザーは、コアシステムに対して、プロフィールや出版物申告を登録して作成し、編集、更新する。大学や研究機関、出版者などの組織は、パートナーシステムからコアシステムに対し、プロフィールや出版物申告をまとめて登録する。コアシステムでは、複数のプロフィールを集めて、マッチングや重複解消をして著者／貢献者の主プロフィールを自動で作成したり、著者／貢献者自らが手動で名寄せするのを支援したりする。そのほか、システムと人、システム間のやり取りを示す個々のユースケースが技術作業部会で議論され想定される技術が列挙された。

7.2 パートナーシステムとの連携

ORCIDのシステムは、さまざまなパートナーシステムと連携する。連携の在り方はさまざまなシナリオとして考えられているが、最も重要なものはパートナーシステムとORCIDのシステムがプロフィール交換を行うことである。研究者のIDやプロフィールを独自に保持して、すでに利用されている、例えば次のようなシステムと連携する。トムソン・ロイターのResearcherID、エルゼビアのScopus、国立衛生研究所（NIH）の助成を受けて開発し全米で利用される予定の研究者ディレクトリVIVO⁷⁾、高エネルギー分野の論文を対象とした論文検索システムINSPIRE⁸⁾、経済学分野の論文を対象とした論文検索システムRePEc⁹⁾、ProQuest社の研究者ディレクトリAuthor Resolver¹⁰⁾、NIHの運営する医学生物系論文検索システムPubMed¹¹⁾である。このようにすでに権威があり、利用頻度が高くユーザー数の多い既存のシステムと連携することは、より信頼性高くすべての研究者を網羅することを可能とする。

7.3 IDシステムのデータモデル詳細化

フェーズ1に予定されているベータシステムは、現在活動中の研究者を対象とし、研究者と団体の双方がアイデンティティを申告することを想定している。データは個人と組織の双方から登録されるため、ある研究者に対してレコードは重複し、識別子、レコード、研究者にn-n-1の対応をつけなければならない。n-n-1の対応というのは、個人の登録も含めてさまざまな組織からある研究者のレコードが登録される状況では、同一研究者に対する識別子が複数付与され、同様にレコードも複数登録されるため、最終的にはそれらがある一人の研究者に紐づけられる必要があるということを意味している。ORCIDが重複するレコードを受け入れることを容認したのは、登録数がクリティカルマスに早期に到達すること、あまりアクティブでない研究者のデータの提供について第三者団体からの申告を見込んでいるからである。

技術作業部会のサブグループの1つでは、同一人物のレコードを判定するアルゴリズムについて議論したが、十分な結果は得られなかったため、アルゴリズムと手動による名寄せのハイブリッドシステムが必要だということになった。その上で、レコードのコントロールとオーソリティについて解決していく。つまり、信用すべきデータの決定方法、同一研究者を指す複数のデータの処理方法、識別子やレコードの管理修正の権限の方法についてである。

フェーズ1におけるベータシステムの開発はビルダー（Geoffrey Bilder）が主導しており、研究者や第三者団体がどのように申告するかというシナリオを考慮しつつ、上述の問題に対処する方法が提案されている¹²⁾。ここではさまざまな団体から申告されるレコードを重複解消して消去するのではなく、研究者本人の申告レコードとそれぞれの団体の申告レコードが“同じである”と宣言して関係を表明する。あるレコードとあるレコードが“同じである”と関係を表明した後、レコードに記述される所属や職名などの個々の属性に関しては妥当かどうか検証すると

いう形をとる。レコードそのものの編集権限はデータを投入した人または団体にあり、研究者の編集可能なレコードへはデータがコピーされる。レコード同士の“同じである”という表明やレコード内の属性の検証を積み重ねて、研究者のレコードはオーソリティが高められていく。しかし、この方法では、新しく登録したデータをどのように既存の識別子と関連づければよいのか、同一研究者に対して複数の識別子が存在してしまった時にどう対処すべきかについては未解決である。これは重複解消のアプローチとは別のアプローチであり、実際のシステムでどちらのアプローチをとるかはまだ決まっていない。

ビルダーの提案した方法は、技術作業部会においてアルファシステムで考えたこととは異なる方法であるが、実装のタイミングとしては、アルファシステムの発展系として位置づけることができる。漸次的にシステムを構築していくことで、システム全体のオーソリティを高く保つようバランスをとることができる」と展望している。

8. その他関連する研究者の識別子

研究者の識別子という観点からすると、ORCID以外にも取り上げるべき活動は多く存在する。例えば、オランダのSURF財団の行ったDAI (Digital Author Identifier)¹³⁾ はオランダの研究者に研究者番号を割り振っている。数物系のプレプリントサーバー ArXiv も Author Identifiers¹⁴⁾ をオプトインの方式で導入している。英国の情報システム合同委員会 (Joint Information Systems Committee: JISC) の助成を受けた Names Project¹⁵⁾ は、機関リポジトリの典拠を目指して、研究者のIDを、英国図書館のジャーナル論文と会議論文の書誌を収録する ETOC (Electronic Table of Contents) の Web インターフェースである ZETOC のレコードをベースに研究者をクラスタリングして自動で構築している。国立情報学研究所では、機関リポジトリの典拠となることを目的の1つとした、研

究者リゾルバー¹⁶⁾ を構築している。これは科学研究費補助金データベース KAKEN¹⁷⁾ をベースにして研究者のIDを付与している。

これらの研究者識別子に関するシステムも ORCID のパートナーシステムとなることが可能であり、ID の登録とプロフィール交換の可能性がある。さらに、Web 上での公開利用を前提としていることから、今後はこれらの識別子同士が Linked Data の技術をベースに互いに同一人物を関係づけることによって連携することも予想される。

より対象を広げてクリエイター一般に識別子を付与していこうという動きもある。ISNI (International Standard Name Identifier)¹⁸⁾ は、現在ドラフト段階の ISO 規格 27729 であり、メディアコンテンツ産業に従事する団体に使われることを想定した規格である。ISNI の ID は 16 ケタの数字で、最後はチェックサムとなっている。ISNI 自体は URI として Web 上に公開することを明示するには至っていない。ISNI の ID は、商用の ID システムの上に展開されるオープンレイヤーとして、ID システム同士が必要最低限の情報を交換して ID 間の対応を付けるブリッジ識別子 (Bridge Identifier) として機能する。交換する情報には URI が必須となっているので、複数の商用 ID が紐づいた ISNI の ID が URI として Web 上に展開される可能性は高い。

ORCID と ISNI は対象とする範囲で重複がある一方、利用の組織や利用の方法が異なり、統合できるものではない。将来的には ID 連携で両システムをつなげることが期待される。

9. ORCID の将来性

ORCID はまだ実際のサービスが開始されていない未知数の試みであるが、筆者らの私見を含めて ORCID の今後について考察する。

単純化すれば ORCID は人間版の DOI である。DOI があれば世界中のどこかの出版社で出版された論文でも確実に論文にたどり着けると同様に、ORCID ID が

あれば世界中の研究者に確実にたどり着けるというわけである。ただ、一度出版されれば変化しない論文と異なり、研究者は活動中で変化するし、そもそも意志ある存在であるので、単純ではない。常にアップデートが可能なような仕組みが必要であるし、多様な活動を結びつけないといけない。より複雑な関係を解決する仕組みが必要である。

ORCID IDは個人のIDである。単に個人にIDを付与するということであれば簡単である。しかし、2章で述べたように研究活動を行う研究者というのは単純な個人ではなく組織や社会の中に位置づけられる存在である。このためORCID IDはこれらそれぞれの立場の関係者の間で維持されないといけないという面倒なIDである。

このため関係者が集合して中立的にORCIDを設立して、この複雑な問題を解決しようと決めたというのは望ましいことであり、成功してもらいたいものである。

では本当に普及するのであろうか？

名寄せやプライバシー管理といった問題は技術的に解決されなければならないし、また解決可能だと考えている。むしろ、問題は社会的に受け入れられるかという点である。

ORCID IDの理想は全世界の研究者コミュニティ

のパスポートのようなものになることであろう。このパスポート取得には特に制約はない。ただこのパスポートを持つことで研究コミュニティの論文投稿を含むさまざまなサービスにアクセス可能になる。今や研究は直接間接にIT化されたサービスなしには成り立たない。その意味では研究者に必須のものとなるであろう。

個人のIDには通常プライバシーと有用性のトレードオフがある。より有用なIDを作ると万一悪用された時のプライバシー侵害の危険が高まる。しかし、研究者のIDについては楽観的に考えている。そもそも研究は個人的なものであると同時に公的なものであるので、先のようなトレードオフによる障害は小さい。むしろ近年のOpen Access運動にみるように研究の公共性は今後より高まるであろう。公共性を重視することは中立性をうたうORCIDを積極的に受け入れる理由となる。この点ではORCIDは大きな可能性がある。

今後の焦点は適切なビジネスモデル構築とサービス構築をいかにスピーディにできるかという点である。せつかくの機運がしばまなうちに普及の軌道にのせることができるかというところにかかっている。

本文の注

注1) 2010年11月11日にワーキンググループメンバーにメールで配布された報告資料による。ORCIDのメンバーとなることで、Wiki上で閲覧できる。

参考文献

- 1) "Research Stakeholders Announce Collaboration among Broad Cross-Section of Community to Resolve Name Ambiguity in Scholarly Research". ORCID. 2009-12-01. http://www.orcid.org/sites/default/files/ORCID_Announcement.pdf, (accessed 2011-10-31).
- 2) "Organization Launched to Solve the Name Ambiguity Problem in Scholarly Research". ORCID. 2010-09-07. <http://www.orcid.org/sites/default/files/ORCIDInc-Press.pdf>, (accessed 2011-10-31).

- 3) "Mission Statement". ORCID. <http://www.orcid.org/content/mission-statement>, (accessed 2011-10-31).
- 4) "ORCID Principles". ORCID. <http://www.orcid.org/principles>, (accessed 2011-10-31).
- 5) "CC0 1.0 Universal (CC0 1.0) Public Domain Dedication". Creative Commons. <http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/>, (accessed 2011-01-14).
- 6) "Open Source Definition (Annotated), Version 1.9". Open Source Initiative. <http://www.opensource.org/osd.html>, (accessed 2011-01-14).
- 7) VIVO. <http://www.vivoweb.org/>, (accessed 2011-10-31).
- 8) INSPIRE, beta. <http://inspirebeta.net/>, (accessed 2011-10-31).
- 9) RePEc. <http://repec.org/>, (accessed 2011-10-31).
- 10) "Author Resolver". RefWorks-COS. <http://www.refworks-cos.com/authorresolver/>, (accessed 2011-10-31).
- 11) "PubMed". National Center for Biotechnology Information. <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed>, (accessed 2011-10-31).
- 12) Geoffrey Bilder. "Disambiguation without de-duplication: Modeling authority and trust in the ORCID system. Version 4". ORCID. http://www.orcid.org/sites/default/files/disambiguation-deduplication_wp_v4.pdf, (accessed 2011-10-31).
- 13) "Digital Author Identifier (DAI)". SURF Foundation. <http://www.surffoundation.nl/en/themas/openonderzoek/infrastructuur/Pages/digitalauthoridentifierdai.aspx>, (accessed 2011-10-31).
- 14) "Author Identifiers". ArXiv.org. http://arxiv.org/help/author_identifiers, (accessed 2011-10-31).
- 15) "Names Project". Mimas. <http://names.mimas.ac.uk/>, (accessed 2011-10-31).
- 16) "研究者リゾルバー". 国立情報学研究所. <http://rns.nii.ac.jp/>, (accessed 2011-10-31).
- 17) "KAKEN—科学研究費補助金データベース". 国立情報学研究所. <http://kaken.nii.ac.jp/>, (accessed 2011-10-31).
- 18) ISNI - International Standard Name Identifier. <http://www.isni.org/>, (accessed 2011-10-31)..

Author Abstract

In this article, we introduce the activities of ORCID (Open Researcher and Contributor ID). ORCID aims to give unique identifiers to all researchers in the world. The identifiers are expected to make scientific communication more accurate and smoother. ORCID Inc, is created as Non-Profit Organization in USA by 14 organizations including major publishers, major universities and research institutions, and a funding agency. ORCID now collects almost 300 participating organizations from all over the world. ORCID ID will contribute to all stakeholders of scientific communication such as individual researchers, universities and research institutions, publishers, and funding agencies. ORCID will release the initial version of its service early in 2012, and then more functional version later in the year.

Key words

researcher identifier, researcher ID, name disambiguation, researcher profile, bibliography, ORCID, scholarly communication